

蠅螂の斧

次の一歩

社会システムを変える

第3回

地域での学びシステムの構築

団 士郎

2016年9月24-25日、横須賀市にある神奈川県立保健福祉大学で、第8回対人援助学会が開催された。相模原の障害者施設で酷い事件が起きた地元である。時期的にも、あの問題に向き合わないわけにはいかない。結論があるわけではないが、理事会シンポジウムとして私も発言者の1人で登壇した。

そこであらためて気がついたことは、あの問題は日本社会の障害者問題における様々な積み残し課題に否応なしにスポットライトを当てたということだ。

事後対応策として行政は、あの施設の全建て替えを5年を目処に決めたそう。しかし、定員百数十人の巨大障害者施設。かつてコロニーと名付けられた大型施設が全国あちこちの不便な場所に建設された。あの時代の日本の障害者福祉界においては、一定の到達点であったろう。しかし今、そんな施設を新設するかと言えば否だろう。

現状として、そこには現在も利用者が存在する。しかし、世の中は進歩、変化している。そこにあの事件が起きて、対策されるのが「かつての枠組みのまま」というのはおかしい話ではないか。

ここに見られるのは、安易な元の姿への復帰ではない。そんなに杜撰な仕事は誰もしないだろう。むしろ動かせない現実、説得力を持たない対案の結果なのだろう。本人への支援と家族への支援は、別の問題として考えられなければならない現実がずっと横たわり続けているように思う。

障害当事者への取り組みはバリアフリー化や諸制度の歩み、地域生活支援の様々な専門家が担ってきた。だが家族へのサポートはそんなに変化していない。今なお、まずは障害受容から始まって…であろう。だから家族の意向が登場すると、暗礁に乗り上げたような古くて新しい問題点が表面化する。

今回の流れの中でも、家族の意向を受けた匿名報道がそうだろう。当事者の地域生活、在宅生活の推進は、苦しむ家族の利害としばしばぶつかってきた。社会に対して匿名のまま、死という不在化を受け入れさせられる自分とは、いったいどういう存在なのだろう。そんな様々な昔からの記憶を、今も変わらぬ課題として想起させられた事件だ。

*

2016年秋、訪れた東北各地は、東日本大震災津波被害を経て、さらに高い防潮堤の建設ラッシュだった。今年も訪れた宮古市田老地区には、それまで世界一だといわれていた防潮堤があった。それが破壊され、多くの人命が失われた。なのにその結果がさらに高い防潮堤をとということになっているのを見て、人間社会は事実から学ぶことのなんと難しいシステムなのだろうかと思った。

これらは共に、大事なことも含まれてはいるが、いずれも次の一歩ではない。前にもあったことを

リバイバルしただけだ。何があっても、失敗しても、まだそのままを続けたがる勢力はあなどれない。それは外にいるだけではなく、あなたや私の内にも住みついている。

*

さて、今回の本題にはいる。さしたる目的もなく訪れた旅先で、思いがけないものと遭遇する。そんな幸運はしょっちゅうあるわけではない。

地名以外何も知らなかった大分県日田を訪れたのは、ほぼ偶然だった。私の母が熊本県久留米市の生まれで「久子」と名付けられたと言っていたのが記憶にあったので、九州新幹線さくらの下車地を久留米にしたのが始まりだった。もっとも、母方祖父は職業軍人で、その赴任地だった久留米で母が生まれただけで、故郷とか出身地というわけではない。

初めての久留米の街を、寺町等を中心にぐるっと散策した。駅に戻って、さてどうしようかと思っていたら、JR久大本線が目についた。久留米から大分で久大線。こんなルートを列車で移動するなど考えたこともなく、更に考えてみると、大分市も訪れる機会のない場所だった。

別府はいったことがあるし、竹田市や国東半島観光はした事があった。そこで大分市でも目指そうかと思った。さらに地図を見ながら、その先の佐賀関からフェリーに乗れば四国に渡れるなあとも思った。開業したばかりの九州新幹線で、ぐるっと九州巡りのつもりだったのが、結果的に気まぐれ優先で大変更になりそうだった。

阿蘇の麓を抜けて走るJR九大本線。大分までの特急が主だったが、急いで大分に向かう理由もないので、途中駅までのローカル列車に乗った。終点で降りたが何もない駅は、まだ久留米市内だった。人影もまばらな駅舎で読書しながら次の列車を待って乗り継いで日田についた。

日田のことは、名前は知っていたがそれ以上でも以下でもなかった。ゆっくりするつमりの車中でネット検索し、二連泊の宿をとった。事情が分からないので素泊まりにした。着いたところは中規模の温泉旅館で、赤い風船などのパクツア一客が主だった。

翌日、街をそぞろ歩いていると、商店の店先や個人宅の玄関前に雛人形が飾られていた。寺の本堂にも多量の雛人形が飾られていた。町を挙げて、こういう趣向らしかった。

そんな観光名所の一つとして、「咸宜園(かんぎえん)」に遭遇した。それまで聞いたこともなかったし、開塾者 廣瀬淡窓のことも知らなかった。ただ、たまたま訪れた街に、江戸時代に開校された私塾の歴史が展示されていただけのことである。それが妙にはまった。案内人の話をたつぷりと聞き、向かいにある資料館を熱心に見学して、結局、半日近くそこにいた。

江戸時代の武士のための私塾をイメージしていたので、三奪の法(入学した者は身分、出身、年齢に囚われず、平等に学ぶ事が出来た)に、ちょっと感心していた。あちこち視察に行っても、何も見てこないことの多い私にすれば希なことだった。

そして自分がしてきたこと、していることが「私塾」なのだなあと思ったら嬉しくなった。資料館の廣瀬淡窓の志がいちいち興味深く、歴史をまとめた書籍も購入して読んだ。

私はしばしばこういう感想、感情を持ちやすい男である。24, 25号執筆者短信で内村鑑三のことに触れた。その時に感じていた事とも共通しているが、自分のしていることを、歴史の中の先人の実践と重ねて納得するのが好みようだ。先人の誰かに学ぼうとか、真似ようというのではなく、自分のしていることを歴史に重ねて、「おうおう、こういうことをした人が先にもあるなあ、そりゃ当然だ」と思うのである。

「咸宜(かんぎ)」とは、ことごとくよろしい、という意味だそうで、皆良いという話である。私にピッタリじゃないか。そんなわけで、全国14カ所で長年継続開催中の「家族理解WS(出張私塾)」が今回のテーマである。

なお今回の文章は、2013年に発刊された、立命館大学大学院、応用人間科学研究科10周年記念誌に書いたものを、加筆、校正、再編集したものが中心になっている。

はじめに

私が長年働いていた福祉の現場(児童福祉、障害者福祉)ではずっと、「地域のネットワーク構築」を願う問題意識はあった。

そして「縦割り行政」、「セクト主義」、「専門バカ」、など、いずれも使い古しの分断表現実態もあった。つまり地域ネットワークとは、なかなか実現は遠いが故に、ずっと言い続けられてきたテーマだった。

わかってはいるのだが、そう簡単には変化しないもの。指摘が慣用句化しているにも関わらず、相変わらずそのままある事態。これは結局、「変化を拒否するよう構築された社会システム」だと言っていいのかもしれない。

藪から棒の突然の事態、事故は、否応ナシに変化のきっかけになりやすい。しかし、予め承知されている事態は、なかなか他からの影響を受けにくいし、反省から学ぶところも少ない。

こういった課題の変化実現が、私にとって長年のテーマなのだという意識は常にある。

臨床現場で

明確な問題意識からと言うより、自然に近い違和感への反応、疑問に対する反応が、後から考えると新たなネットワーク作りを志向することになった。

ことさら困難なテーマからというわけではなく、次々と現実の改善から着手したのが、結果的にそれだったわけだ。ここではその実現に向けて摸索した道筋と、道中で手にした知見を述べたいと思う。これに至る道筋はけっして計画性を持ったものでも、直線的に展開を実現できたものでもない。

対人援助領域における実践は、常にこの世界の持つ現実のディテールに寄り添っていないといけない。

杜撰な現状認識しかないと、業界内流行語はあっという間に消費され、問題意識の上っ面を撫でただけで消えてしまう。用心しておかないと、専門家の利益確保のためのアリバイ作りに手を貸すことにさえなりかねない。

児童相談所にとっての家族療法

児童相談所業務に内部スタッフとして家族療法を導入したことの意味が、しばらく経ってからはっきりと分かったのは大きな事だった。

多くの専門機関がそうだが、業務は基本的な仕事の流れを持っている。担当者個々の特性にかかわらず、進め方には基本形式がある。これは、その業務に関する理念、原則の上に形成されている。

子どもの問題で来談したとき、親面接は児童福祉司が、子どもの心理面談は心理判定員(現・児童心理士)が行うのが定番だった。

今はかつてほど頑なではないかも知れないが、基本的にこの役割分担は健在だ。そして担当する両者の見解の食い違いによる不満や葛藤も継続中だろう。

それまでしばしば起きていたのは、こんな事だった。子どもの面談が長引いて、児童福祉司の親面接はとっくに終わってしまっている。アドヴァイス好きの児童福祉司は、面接が長引くと、持ちネタがなくなってしまう。そして、なかなか終わらない心理面接にイライラする。



心理判定員からの継続面接提案も、児童福祉司には毎週時間を取られて、他ケースの訪問や調査に支障をきたすだけだ。一方、心理職は児童福祉司が親に話している内容が同意できない。

そして「子どもは良くなってきているが、親が問題だ」、「親は反省しているから、もう大丈夫なのに、いつまでセラピーをするのか。子ども一人で来させるようにしてくれないか」など、担当者間の葛藤が表面化していた。

今もあちこちで行われているであろう親子併行面接ゆえの見解の相違。これは積年の頭痛の種だった。

家族療法の形式を取り入れたとき、けっしてこの問題意識が先行していたわけではない。相談の形として合同家族面接をすることになり、親担当、子ども担当という別室での併行面接が変わることになった。

家族面接室と観察室、二人の担当者がどちらかに位置して、共同して面接展開を見ることになった。やり始めて分かったことだが、合同家族面接を採用したことが、児童福祉司と心理職間のギャップを取り除いてくれた。

だから家族療法の採用は、心理療法の一技法を導入したのではなく、児童相談所に於ける従来型の面接スタイルの変更だった。これは百の理屈よりも明快な現実だった。

そして当初は心理職の研修だと認識されていた家族療法訓練に、児童福祉司職にある人が参加するようになった。今では、家族療法研修に児童相談所から参加するのは、児童心理士、児童福祉司、半々くらいになっている。

してきたこと、たりなかったこと

公務員を退職する時期と前後して、いくつかの地域で、対人援助職に従事する人たちを対象のワークショップを始めていた。この核にあるのは京都国際社会福祉センター(KISWEC)で二十五年余り、現在も継続している「家族療法ワークショップ」である。

全国の児童相談所を中心に、今では福祉現場のみならず、教育、保健、医療、司法など、対人援助のほぼ全領域の人たちが受講する家族療法ワークショップstep1、step2、step3、更に「援助職者の原家族を見つめる」を継続開催している。

波はあったものの受講希望者は途絶えることなく、四半世紀を超えて現在に至っている。これまでの受講者総数は1500名を超えることになるだろう。

この事実は、KISWECで実施するプログラムが、時代を越えて普遍的に有用であることを示しているだろう。

研修内容の話ではない。長年愛用されて、今もコンスタントに売れ続けている定番商品のイメージである。これと対比されるのが、大ブームを起こし、あつという間に色褪せて忘れられてゆく商品である。

では、二十五年以上も続くものが作り出す状況とは、どのようなものだろう。長い時間が形成するのは、けっして技法やプログラムの結果だ



けではない。

WSを経験をした終了生は、各地での日常実践の後、時と共に管理職になっていった。良い学びだったと思う者は、部下や後輩にこのプログラムへの参加を勧めた。その結果、「うちの課長が薦めてくれたので・・・」、「先輩からは是非と言われて・・・」という各組織内からの参加者が増え、それが世代間連携のきっかけになった。

「家族」に関する共通のキーワードを持った多世代のスタッフが働く場を形成する触媒役を、このプログラムが果たすことになった。

しかし一方、このプログラムが全国各地の希望者が受講できることや、出張扱いで参加する公務員も多いことから弱点も抱えていた。

日本中から集う専門職同士のネットワーク作りとして、少なくない貢献はある。しかし、それが各地元での近接領域間のネットワーク形成に、リーダーシップを発揮できるようになるところまでは、なかなか推進できなかった。職場内では、よく機能できてきても、なかなか地域ネットワークの核にまではなりにくい。

研修の持ち方が結果的に「地域の連携」というキーワードを排除している面を否定できなかった。

地域での連携

そんな問題意識を持ち始めていた20年ほど前、青森県からの受講生が、「ここ(KISWE C)で行っていることを、地元で働く人たちと一緒に、地元で受けられないか」と問いかけてきた。

各地に出向いて行って、継続的研修を実施する発想はなかった。それまでの経験から、実現可能性に悲観的だったのだ。

何でもそうだろうが、物事が動き始める段階で、全てのことが分かっているわけではない。動きながら明らかになってゆくことも多いし、当初の目標より大きく発展した現実が構成される幸運もありえる。

結果的にこれがきっかけになって、全国各地で自主的で継続的なワークショップの開催が実現されてゆくことになった。

青森県の児童相談所職員であった女性に、地域における世話人グループを形成してもらい、地域に合ったワークショップ企画の展開を促すことにした。

こう書いてしまうと簡単なようだが、実現は大変だった。地域のネットワークづくりを、公の肝いりではなく、現場で働く人の意志の繋がりで形成してゆくのはなかなかだった。だからこの準備段階に時間をかけた。思いつき即実行のイベントは、一、二度は盛り上がるが、たいてい急速にしばんでしまう。個人の情熱は冷めやすいものだ。

近年、大きな災害被災に対して市民社会がボランティア活動を組織化し、多くの人たちの連帯があちこちで生まれてきている。これは従来には見られなかった日本社会の進歩の一つだろう。

この流れを片方の車輪だとすると、もう一方は地域で専門職として従事する人々の使命感(専門職としての責任感)の連携だ。縦割り行政などといつまでも言っていないで、渦中の者が自ら構成してゆく。私が目標にするこちらの方が、なかなか継続実現は難しい課題なのである。

研修のツボ

非常に意欲的な人が、高額な費用をかけて、都市部の学びの場に出てくることや、短期留学

にチャレンジするのは、珍しいことでも難しいことでもない。こういう研修の盛況は過去も現在も、そしてこれからも繰り返されていこう。

それが意欲的な個人の仕事や人生に貢献するところがあることを、否定するものではない。その道のトップランナーとして、然るべき地位や職を得ることになるのを批判する必要もない。

ただ、私の興味関心はそこにはない。こちらは地域における人の繋がりと、地域社会資源の繋がりを実現するべく、共通言語(私の場合は、「家族理解」)獲得の学びの場を協力して作り上げていく事を目指した。

これがエリート消費者としての研修参加ではなく、地域社会に於ける対人援助職従事者のネットワーク作りへの一歩だと考えていた。

当然のことだが、ネットワークという言葉の背景には持続、継続する営みが想定されている。従って、実現される学びの場も又、継続されるものでなければならない。この継続は次世代にまたがった連携を含み込んでいる。

とはいえ第一歩の青森において実現されていたのは、職場はまたいでいたが、先ず限定された業種(児童福祉関係職員)の人たちの研修であった。

更におおきな壁は、お金を払って講演会に行く人など地元には少ないという当時(20年も前)の地域社会の常識だった。確かに地方に行けば行くほど、講演会や研修会は、公やスポンサーによって企画され、出席者は動員されていることも少なくなかった。研修とはそういうものだと認識されていた。

だが実際に始めてみると、思った以上に参加者は熱心だった。直ぐに参加者有志によって二回目が計画された。条件に恵まれた人、選ばれた人だけの特権だった学びの機会が、身近なものになった。

無論、プログラム内容も関係なかったとは言わない。しかし従来の研修マニアには希薄だった一緒に学び、地域社会に新しいものを作り上げていくという動きが新鮮だった。

青森県での取り組みは結果的に、現在まで(2016年)17年以上も継続中である。当然参加者は変動してゆく。

しかしその割に、プログラム内容は大きく変化

はしてゆかない。同じ事の繰り返しを中心である。リピート参加者の中では深度が更新されてゆく。その実感は、参加者個々人の地域社会に於ける役割の変化を見れば一目瞭然である。

地域社会の抱える課題に、直線的因果論で成果や効果の立証できるものなど限られている。参加者が自分の意志として十年以上も続けていることと、その主観的体験として、地域の一員としての役割達成感こそ、それぞれが受け取



った成果物である。

デザイン 研修に於ける原則

おこなってきたことの整理をしておく、おおむね四つの原則が立つと思う。

第一は誰が対象かということだ。研究者中心から現任者中心にしようとした。更に言うなら、学ぶことが好きな人よりも、実践家であることに軸足を置いている人を対象に考えた。これは地域開催することで自然に、研究者、大学関係者(教員、院生、学生)より現場の人の参加者比率が高くなった。一つの職場、地域、事業所から複数の人たちが参加し、共有できる学び(共通言語)が生まれた。

地元開催なら、子育て真っ最中の人や介護渦中にある人も、参加できるようになった。

第二番目に考えたのは、出席者のモチベーション形成のことだ。「どこかが企画した目新しい講習会に、自分も一度顔を出してみるか…」、こんなレベルの研修動機は、ほぼ継続することはない。研修マニアはあれもこれもと雑食だが、結局そのどれも深く

味わうことがない。

だから地域で継続的に参加するメンバーを育てることが目標になった。回を重ねる研修会で近接領域の人たちが繰り返し参加し、交流する。そうなれば受講生が即、地域ネットワークの構成員になる。

そのため、開催日程は土・日・祝日にした。プライベートの時間を業務に役立つ学びのために使うのである。

公的機関から年間行事の一つとして打診される研修依頼より、こちらを優先した。

第三に研修費用のことも、よく言われるように身銭を切ってこそだと思った。そこで費用は参加希望者なら、誰もが自己負担できる範囲の設定にした。地元開催なら参加者の交通費、宿泊費もゼロ近くなり、受講経費負担はより軽くなった。

全国各地で試行錯誤を繰り返した二十数カ所の中で、結果的に継続しているのは、この参加者自己負担方式をとったところだった。

どこからか予算がついて開催したものは、予算の切れ目でことごとく消えた。その後、自分たちの手で続けていこうと声をあげる参加者グループも存在したが結局、皆中断になった。

四番目に心がけたのは、プログラムを繰り返すことだ。これでいつも新しい参加者に門戸を開いていることを示し続ける。

「深く狭い専門家」が地域社会に必要なのではない。研究会や勉強会が特定の人たちのサロン化してゆくのは、途中から参加する者を阻むようなシステムになってしまっていることが大きい。

リピーターは繰り返しの中で習熟してゆく。新規情報を次々手にしようとするのではなく、上手になって、職場での処遇力がアップしてゆくことを目標にした。

継続

何事においてもいきなり大きな変化や転換が起こることはない。そう根拠のある話でもないが、一つの目安は十年だろう。十年続くものなら、内容よりその継続をもって、一つの意義、信頼を形成していると考えてもいいだろう。

新しいことを始め、それを継続維持してゆくに

は、中身もだが、運営の上手さも大事だ。そしてそれらが幸運をつれてきた時、新たな一歩が確保される。

こんなことを考えて着手して十数年。今も全国あちこちの地域に通い続けている。そしてそこには十年つきあいの現任者、管理者、そして新しく参加し始めた若者たちがいる。どの会にも共通しているのは、中心メンバーの領域だけではなく、関連近接領域からの途中参加を受け入れていることだ。

ネットワークの議論ばかりやかましく、いざとなると押しつけあったりしがちな地域社会システムを、一歩変化させるためには、中味よりも形式の変化に着目するのが早道だった。

変化は一気には起こらない。起きているのかどうかさえ、あやふやなところのあるものだ。しかし、今までなかなか実現しなかったものが生まれ、存在し続けているのをみると、変化は起きていると実感できる。社会の変化はこれくらいのスピードでいいのかもしれない。

多層的連携

このような各地での実践継続は、十年も過ぎると、あちこちで具体的な変化を生みだした。新しく参加する人たちの中に、初期からの参加者の部下であったり、組織構成員だったりする人が増えたことは先に述べた。加えて、母と娘の二代にわたって参加している人や、「娘が大学院でお世話になりました」と語る母親(教員)もいる。

また、参加者の属する現場が徐々に拡大していった事にも気づいた。福祉全般(児童相談所、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、福祉事務所、障害者諸施設、高齢者施設、ヘルパー、ケアマネジャー)のみならず、教育(小中高教員、特別支援学校、スクールカウンセラー、養護教員)、保健(保健師、助産師、精神保健相談員)、医療(医師、看護師、心理士)、そして司法分野(家裁調査官、調停委員、弁護士)からの参加者も増えた。更に、近接領域だと考える人たちの属する民間企業や組織からの参加も増えた。

近接異分野との連携、交流を声高に言いつ

のっているよりも、はるかに実態的变化が生まれ始めた。

また、初期からの参加者達の身上には、人事異動や昇進、退職、転職など、個人に属する変化も当然のように起き、それも研修会に変化を与えた。そここにネットワーク成立の結果が確認できることになった。

当然、人の行動選択には、様々な要因が関与する。一つのキーワードで、人生の多くの時間を乗り切れる人は希だ。人は飽和するし関心もうつろう。

だが一方で、一つのことに長く関心を持ち続ける人も出てくる。その結果、受身だけではなく、自身の関心をライフワークとして実践し続ける人も登場する。

地域社会にこういった人材が生まれ始めると、そこに取り残された地方都市のイメージはなく、今日社会の拠点の一つになって輝き始めた。

地域にスーパーヴァイザーはいる

このように、家族システム論的な視点からの現状を理解する人々の居る複数分野の地域社会資源が連携しはじめ、それによって切り開かれた新たな現実が動き始めた。それが地域開催の家族理解WSとして、全国各地で数年、場所によっては十数年も継続開催される学習の場に育つことになった。

ネットワークが生まれた場としての継続研修会には、若い世代も多く参加するようになった。そこには、職場ではなかなか出会えない地域社会の人材といえる業界のベテランが待っていた。

現場のあちこちで長年間かされてきた、上司、管理者がスーパーヴァイザー能力に欠けているというグチにも変化が起きた。

各組織は頻繁な人事異動などで、多くの現場が素人集団化し、防衛的にならざるを得ないと思われる現実がある。そんな中で専門職のベテランと若い世代が親しく言葉を交わせる場の継続的確保は、まさしく地域社会システムに於ける連携の実現である。職場では短期異動が多くても、地域社会にはベテランがいた。

現在継続中の地域プログラムとしては、年四回開催の東京は50回を超えた。年二回開催の札幌、弘前、埼玉、金沢、岡山、松江、高知、年一度の山形、広島。隔月開催の草津(滋賀)、毎月開催の京都(立命館大学)、大津。いずれも長きにわたって開催中である。

★関心のある方は雑誌奥付にある編集長のアドレスにお問い合わせ下さい。

スピンオフ ほほえみプロデュース

専門細分化された時代の行き詰まりに、専門職を増員することだけで対応するのではない地域作りが青森で始まった。(詳細は、本マガジンバックナンバー第6号からの連載を参照)

この企画の中心人物は、弘前勉強会の開催事務局を永年つとめた人だ。問題解決に専門家が対応することに終始するのではなく、予防に力点を置いた取り組みを考えたいというスタートだった。

「県民にもっと笑顔を」という行政の事業としては荒唐無稽にも思えるプロジェクトだが、知事みずからが関心を示したことで、進められることになった。

予防の取り組みとして、地域のコミュニケーション活性化のために、住民有志に「笑い療法士」(小児科病棟の取り組みとして、諸外国で有名なスキル。映画「パッチアダムス」で取り上げられている。長期入院中の子ども達に笑顔を！という目標で実施されるプログラムである。)の研修訓練を受講して貰う。

受講者を組織し、ねずみ算式の伝達講習会をプランし、地域に降ろしてゆく、現在も進行中の取り組みである。開始五年でファシリテーターとして、活動可能な研修受講県民数が二万人を越えたそう。

そして行政主導の事業としては区切りを迎え、NPO法人活動になって、継続進行中である。